

[書評論文]

本多 啓『アフォーダンスの認知意味論—
生態心理学から見た文法現象』2005. 東京:
東京大学出版会. pp. xv+331. ISBN4-13-086032-1

李 在 鎬

1. はじめに

日本語を知っている者であれば、誰もが難なく(1)を理解することができる。

- (1) a. 京都が近づいてきた。
- b. 山脈が東から西に走っている。

(1)は一見普通の日本語に思えるかもしれない。しかし、よくよく考えてみるとこれは実に不思議な文である。このことは(2)との対比でより明確になるであろう。

- (2) a. 人々が教会に近づいてきた。
- b. 生徒たちが学校から海岸に走っている。

(1)における「京都」や「山脈」は(2)の「人々」や「生徒たち」と違って、走ることはもちろん、自らの意思でどこかに近づくことなどできない。したがって、文字どおりに(1)を捉えるならば、(選択制限の違反から)非文になるはずである。しかし、(1)は日本語としての自然さを得ているだけでなく、これを聞いた人は(発話者の視点が変化したものと)普通に理解することができる。なぜこのようなことが可能になるのだろうか。その背後にはどのような認知的メカニズムが存在するのだろうか。本書は、この種の不思議さを理解する鍵を与えてくれる。

2. 生態心理学におけるアフォーダンス

本書は生態心理学 (ecological psychology) (Gibson 1979) の知見から日英語の言語現象を分析した研究である。生態心理学は、環境に対して個々の生物がどのように知覚をし、自分の道を切り開くのかを理解しようとする理論である (cf. 佐々木 1994, Reed 1996)。その研究成果の一つが本書のタイトルにもなっているアフォーダンス (affordance) という知覚のメカニズムである。アフォーダンスは生態心理学の提唱者である J.J. ギブソン (Gibson, James Jerome) による造語で、その辞書的定義は、環境世界が知覚者に対して与える意味のことである。例えば、椅子は人間に対して「座る」という行為を提供 (アフォード) する。豆腐は人間に対して食べることをアフォードする。空気は人間にとって呼吸をアフォードするが、水はそうでない。生態心理学における環境世界は、生物にとって単なる物質的な存在ではなく、直接的に意味や価値を提供するものと理解され、環境の中の各々の存在物が知覚者に提供する行為の可能性こそがアフォーダンスであると言える。

本書は、このような (言語現象とは一見無関係と思われる) 知覚の特性が日常の言語現象に対して重要な説明的基盤を提供すると考える。特に中間構文 (middle construction; e.g. *The knife cuts well.*) といった、アフォーダンスを表現対象とする文法的現象に注目し、独創的な分析を行っている。

3. 言語現象におけるアフォーダンス

本書で展開される生態心理学的知見に基づく言語分析を具体的に見ていく。手順として全体の構成を紹介したあと、各章の基本的な主張を確認する。

まず、1章から3章では本書の理論的背景の解説や道具立ての導入をめぐる考察が行われる。主として生態心理学の基本概念を紹介しつつも、言語現象からの新たな位置づけが試みられる。これらの議論は、本書の基本的問題意識を理解する上で極めて重要なものであり、言語現象分析の基盤となる。次に、4章から10章においては生態心理学の知見から様々な言語事例の分析が行われる。特に4章と5章においてはアフォーダンスを表現対象とする言語形式として中間構文が取り上げられ、示唆に富んだ議論が展開される。また9章と10章では、個体間の相互行為の観点から発話行為やコミュニケーションの問題が取り上げられる。その際には、共同注意 (joint attention) (Tomasello 1999, 宇野・池上 2003) の観点から談話や節構造の分析が行われる。最後に、11章では関連モデルから本書のアプローチに対する再評価が試みられる。

第1章では、本書に通底する基本的言語観が提示されており、著者の問題意識の根幹に関わ

る議論が展開される。特に言語の意味をめぐって認知言語学が標榜する(3)の「捉え方の意味論 (semantics of construal)」を軸とし、認知科学や生態心理学との接点が模索されている。

(3) 捉え方の意味論

話者(認識・表現者)が、どのような対象をどのように捉えて (construe; あるいは認識して) 表現するか。そのような捉え方の背後から支えている認知のメカニズムはどのようなものか。

認知言語学と生態心理学や認知科学の接点は2点に集約できる。1点目に認知言語学が採用する(3)の見方は、古典的解釈意味論および客観主義意味論とは異なっており、認知主体の内的プロセスを重視する。2点目に意味のありかをめぐって客観主義意味論を排除する認知言語学的見方は主体の身体性を重視する。この点において、主体と環境の相互行為を重視する生態心理学的見方と認知言語学は親和性を持つ。結論的には、生態心理学と認知言語学は理論的互換性があるだけでなく、相互補完的關係である。

第2章では、生態心理学における自己知覚の概念が紹介され、言語現象からの関連づけが行われる。具体的には話し手を表現する形式として(4)のゼロ形による(話し手が直接には表現されていない)表現の問題が論じられる。

- (4) a. 二人の男がゆっくりと食堂のドアを開けて、中に消えた。
b. 食堂のドアがゆっくりと開いて、二人の男が現れた。

(4)においてまず確認しておきたいのは、これらの文に登場する人物は二人だけである点である。しかし、この(4a)と(4b)ではもう一人の人物、すなわち話し手の存在が伺え、(4a)と(4b)での話し手の位置が違うことが分かる。というのは、(4a)ではおそらく話し手は食堂の外にいますが、(4b)では中にいる可能性が高い。となると、これらの文には二人の男の行動だけでなく、それを観察する話し手の存在とその立ち位置が表現されていることになる。このことを生態心理学的にいうと環境の知覚と自己の知覚が相補的であることのストレートな表れということになる。Neisser (1988) が言うエコロジカル・セルフ (ecological self)、すなわち事物の知覚に伴って直接知覚される自己である。この一見些細な問題にも思われる事実関係が言語学の古くて新しい問題に新たな一般化をもたらす。具体例として主体移動表現 (subjective motion expression) (Matsumoto 1996, Talmy 2000, 山梨 2000) や形容詞の交替現象 (e.g. 父の死が悲しい/私は悲しい/私は父の死が悲しい) が挙げられる。詳細な考察は4章以降で展開される。

第3章では、本書の中心軸ともいえるアフォーダンスをめぐる一般的紹介が行われる。その際、生態心理学的定義のみならず、発達や言語獲得などの関連領域から考察が加えられて

おり、アフォーダンスという概念の基礎づけが試みられている。繰り返しになるが、アフォーダンスの概念的定義と本書での位置づけを確認しておきたい。アフォーダンスとは、事物が環境の中でそれぞれの知覚者に対して持つ意味であり、行為の可能性である。また、アフォーダンスは、各々の知覚者が環境の中で（受動的に知覚されるものではなく）「能動的な探索活動」を通じて知覚するものと考えられている。ただし、どこまで主観的に構成されるのかという点では議論の余地がある。というのは、一部の研究者の間では、「アフォーダンス＝環境から与えられるもの」という側面が強調されすぎる傾向が存在する（cf. 佐々木 1994, 佐々木・三嶋 2005）。この点に関して著者は非常に柔軟な理解をしている点はあらかじめ断っておきたい。いずれにせよ重要なことは、ある事物がある知覚者にとってどのような行為をアフォード（提供）するかは、その事物の持つ属性だけでなく、知覚者の属性やスキルに依存するということである。例えば、体重 50 キロの人物に「渡る」ことをアフォードする吊り橋は体重 200 キロの人物にはアフォードしないこともある。Y 先生の研究室は Y 先生自身に整理整頓をアフォードせず、いつも書類と本が部屋中に散乱しているが、同じ作りの T 先生の研究室は T 先生自身に整理整頓をアフォードする。このように、アフォーダンスは環境の中で対象と知覚者の「関係」として存在する、ということを経験しておく必要がある。このことは、言うまでもなく認知主体の身体性を重視する認知意味論の見方と、相互作用を重視する生態心理学の理論的互換性を示唆する証拠になる。

さて、以上で紹介した道具立ておよび理論的視座に基づく言語事例の具体的分析が 4 章以降で展開される。

第 4 章では、アフォーダンスに動機付けられる構文現象について考察される。特に (5) の中間構文 (middle construction) とその関連現象として (6) の連結的知覚動詞構文 (copulative perception verb construction)、(7) の主体移動表現 (subjective motion expression) が取り上げられる。

- (5) Bureaucrats bribe easily.
- (6) This flower smells sweet.
- (7) This road goes from Modesta to Fresno.

結論的には三者間で並行関係が成立する、という論旨が展開される。その論証として (5) が持つ (8) の特徴が (6) や (7) においてもオーバーラップして観察できることが指摘される。

- (8) a 述語動詞は探索活動を表す。
- b 動詞句は主語の指示対象が持つアフォーダンスを表す。

- c 文全体として探索活動の結果生じる知覚・行為者にとっての対象の見えを表現している。
- d 行為者は明示されない場合、エコロジカル・セルフのレベルで捉えられている。

さて、以上の分析が持つ意味を考えてみたい。まず、(5) との連続的關係で (7) を捉えることで、本書のアプローチは (7) を (移動動詞による) 移動構文ではなく、(行為動詞による) 擬似中間構文 (pseudo-middle) として位置づけることを提案する。このことは、少なからず重要な理論的含意を持つように思われる。従来、動詞を中心とする枠組は (7) における本動詞の語彙的特徴に引っ張られ、移動の有無について議論の泥沼化の傾向を見せている。それに対して、本書のアプローチでは (7) を移動動詞の研究という枠組から解放する。これによって、従来の分析における混乱を回避しつつ、構文の成立に対する新たな仮説を提案している。それは、異なる構文間の関係を連続的關係として見直した点である。これは、移動が行為の一種であることに着目した結果である。また、(8) の一般化は (5) における (9) の古典的問題に (10) の見方を示す。

(9) 本来なら目的語の位置に現れるべき名詞句が主語位置に現れるのはなぜか。

(10) アフォーダンスとは対象の持つ (知覚者にとっての) 性質であり、動詞句がある対象の性質を記述したものであるならば、その対象を指示するものが主語位置に生じるのはきわめて自然なことである。

第5章では、4章における (8) の一般化を踏まえながら、中間構文の様々な記述的問題が考察される。前半部では、記述的立場から中間構文の容認可能性の問題や動詞の意味的類型が考察される。後半部では、理論的観点からアスペクトや動作主性の問題が考察される。結論的には探索活動を表すことができない動詞 (e.g. learn, understand, make, fear) を中間構文に用いることはできないと主張しており、(8) に対する補強がなされている。

第6章では、空間の構造という観点から主体移動表現が考察される。主として移動行為に対して次の特徴づけが行われる。移動行為は探索活動の一つであり、環境と主体の相互行為である。このことから移動行為は空間に対する知識の獲得プロセスと位置づけることができる。一見ラディカルに思える見方ではあるが、こうした特徴づけは、移動を空間情報の関係から定義し、従来の一般化 (cf. Givón 1979:324-325) に生態心理学的基礎づけを可能にする。また、メタファー的拡張の問題を体系的に捉える手掛かりになると同時に先行研究で「到達経路表現 (access path expression; e.g. There is a tower across the river.)」や「空間的分布を表す時間語彙 (e.g. begin, end, のち、あと、)」のような形で注目されてきた現象に関しても統一的に説明できる。特に、到達経路表現に関して言えば、主語の指示対象のアフォーダンス、すなわち対象までの移動による到達を表すと分析でき、4章の分析結果を継承している。

第7章では、自己表現を中心に日英語の表現構造の違いに関して考察される。特に国広(1974)や池上(1981)による「なる的/する的、自動詞構文/他動詞構文、状況中心/人間中心」のような古典的議論を踏まえながら、日英語の違いの一端が、自己の表現のあり方の違いとして再分析できることが示されている。具体例として英語では(11)の透過的構文が好まれているのに対して、日本語では(12)のような共感的構文が好まれるという観察を示している。

(11) We were approaching Kyoto. (われわれは京都に近づいていった)

(12) Kyoto was approaching. (京都が近づいてきた)

これらの文例からいくつか重要な問題提起を行う。例えば、自己の表現手段をめぐって、英語における典型的構文(11)は一人称代名詞を、日本語における典型的構文の(12)はゼロ形を用いる。また、状況をどこから見ているかという問題をめぐって、英語は視座を移動して外部から見ているが、日本語は状況の中において見えたままを描く。こうした日英語に見られる相違に生態心理学的知見から基礎づけを与え、自己表現をめぐる日英語の相違が文レベルに限らず、テキストや社会的場面においても一貫して見られると主張されている。

第8章では、生態心理学に基づく本書のモデルの妥当性を示唆する、様々な言語現象が網羅的に扱われる。自己知覚をめぐる問題として偶然確定条件文の問題(e.g. 動物園にいけば、パンダがいるよ)、社会的場面における自己知覚の問題として美化語の問題(e.g. お金、お水)、そして対象の知覚と自己知覚の相補性の観点から形容詞の意味構造の問題、さらには可能表現や複文の問題など、現象レベルの一貫性はないものの、自己知覚の表現をめぐる様々な言語事実が網羅的に紹介されており、生態心理学に基づく分析モデルの汎用性が示唆される。

第9章では個体間の相互行為的観点から談話文が分析される。特に近年の認知科学で脚光を浴びつつある共同注意との関係から「文構築の相互行為性」(文は話し手が独力で構築して発話するのではなく、話し手と聞き手の共同行為の中で作り上げられる)という考え方が提案される。この考え方に依拠するなら、会話は「キャッチボール」ではなく「みんなで玉転がし(複数の人間が協調して一つの大きな玉を押ししていくもの)」とみなされる。なお、ケーススタディとして日本語の接続助詞と終助詞を行き来する「から」節の問題を扱っている。

第10章では、9章に引き続き、(見えの共有という意味での)共同注意の観点から日本語の統語現象が分析される。特にReed(1996)の(子供の言語発達上のバリエーションとして)「指し言語(indicational language)」と「語り言語(predicational language)」の区別を導入し、現象を特徴づけている。前者は、文法構造を持たず、ほぼ指さしを言語化したもので、個性が強い言語のことで、その具体事例として(13a)の一語文、(13b)の現象描写文が論じられる。後者は、言語共同体で共有される規範にのっとった言語形式を持ち、一般的・

生成的な言語のことで、具体事例として (14a) の左方転移 (left dislocation) と (14b) の無助詞格成分が論じられる。

- (13) a. ごきぶり！／お茶！
b. わあー、空がとても青い。
- (14) a. 教科書やマニュアルに沿って教えていても、なぜか出てくる学習者の誤用。それは日本語教師なら、誰でも一度は陥る「落とし穴」でもあります。
b. 朝ごはん食べた？ (cf. 朝ごはんを食べた？／朝ごはんは食べた？)

具体的な主張として (13) や (14) が共同注意を成立させるため用いられるという見方が示される。最終的には発話の意味が相互行為の中で構築される、という一般化を言語現象から実証しており、(語用論の分野において古くから議論されている)「言語表現や行為が状況の中で帯びる意味は、発話者や行為者によって専制的に決められるものではない」という見解を示している。

第11章では、本書のモデルの理論的位置づけをめぐって、関連モデルを紹介しながら、本書の分析モデルの再評価がなされる。特に (3) で示した「捉え方の意味論」と時枝 (1941) の言語過程説の異同が論じられる。結論として両者は根底において相通じる面が多いとしながらも、詞辞二分論をめぐる立場の相違を明らかにする。次に自己知覚の観点から Langacker (1990) の主体化と廣瀬 (1997) の「公的自己・私的自己」の関連が論じられる。結論的には本書の枠組みが Langacker (1990) の洞察に対して生態心理学的観点から基礎付けを与えるものであると主張している。

4. 認知言語学に対する示唆と提言

本書の位置づけを理論面・現象記述面で考えてみたい。まず、理論的位置づけについて考えてみた場合、本書は言語学と認知科学の橋渡しの存在であるということが出来る。その理由として、全体の考察において「知覚の特性が言語にどう反映されているのか」という問題意識を生態心理学の知見から具体的に議論している点が挙げられる。これは「言語とは何か」という根本的な問いに関連分野の知見を統合しながら果敢に立ち向かっており、言語現象の認知科学的基礎づけを試みたものと評価できよう。

こうした試みは、認知言語学と認知科学のギャップを埋めるための作業という意味で、空虚な認知構造を云々する研究とは一線を画す研究と言える。その背景として、近年の顕著になりつつある傾向であるが、認知言語学は「認知」という名前こそ共有しているものの、認知科学の研究成果から一部矛盾する方向性を示しており、認知科学からの乖離が目立つ。例

えばプロトタイプのような抽象的な表象に対する現在の認知科学の位置づけはかなり批判的なものになっており、認知言語学内での評価とは大きな隔たりを示す (cf. Murphy 2002, Barsalou et. al. 2003, Bybee 2001)。こうした現状を考えるならば、本書は単なる橋渡しを超え、認知言語学に対する健全な方向づけを行っている点でも大いに評価すべきであろう。

次に、現象記述面の位置づけを考えてみたい。まず、確認しておきたいのは、本書が扱っている現象の多くは構文現象であるということである。このことを踏まえ、本書を評価すると、その最大の特徴は従来の枠組みが形式的な操作と抽象表示によって分析することが多かった、構文の記述的一般化に直接知覚論の知見を援用しながら新たな位置づけを与えたことである。理論言語学の醍醐味とも言える発見が満ち溢れている。

本書が行っている捉え方の問題や知覚論からの基礎づけは、形式主義への挑戦のみならず、認知言語学に対してもある種の見直しを示唆する。(直接的には言及されていないが) 現象レベルの並行性から構文文法 (construction grammar) へ大きな示唆を与えていると言える。とりわけ Goldberg (1995, 2002) を筆頭とする抽象的構文文法に見られる「動機づけの不在問題」、すなわち構文の成り立ちに動機づけを与えないまま、議論を進めている現状に一つの突破口を与えている。次節では、こうした現状を確認したあと、本書のアプローチがどのような示唆を与えるかを具体的に考えてみたい。

5. 構文文法に対する示唆

本書のアプローチとの関連から Goldberg の議論を捉えてみた場合、両者の関連性を示唆するものとして場面記号化仮説 (Scene Encoding Hypothesis) が挙げられる。Goldberg はその著書の中で「基本的節レベルの構文は各々、人間に関連する場面、たとえば、何かがあるかの位置を変化させたり、動作主が何かの状態を変化させたり、といった場面を指定する」と述べており、以下の仮説を立てている。

(15) *Scene Encoding Hypothesis*:

Constructions which correspond to basic sentence types encode as their central senses event types that are basic to human experience. (場面記号化仮説: 基本的な文タイプに相当する構文は、人間の経験において基本的な事態タイプを中心的意味として記号化する)

Goldberg (1995:39)

上記の仮説においては知覚を含む広義の「経験」という概念を言語現象、とりわけ構文現象に結びつけ、事実を捉えなおした点で本書の問題意識とオーバーラップする部分が多い。さて、Goldberg (1995) では (15) の仮説に基づき、(16) の文タイプを具体的に特定し、こ

れに対応づけられる (16') と (16'') のペアリングから項構造構文 (Argument structure constructions) を定義している。

- | | |
|--|-----------------------|
| (16) a. Pat faxed Bill the letter. | ⟨Ditransitive⟩ |
| b. Pat sneezed the napkin off the table. | ⟨Caused Motion⟩ |
| c. She kissed him unconscious. | ⟨Resultative⟩ |
| d. The fly buzzed into the room. | ⟨Intransitive Motion⟩ |
| e. Sam kicked at Bill. | ⟨Conative⟩ |
-
- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| (16') a. Subj V Obj Obj ₂ | (16'') a. X CAUSES Y to RECEIVE Z |
| b. Subj V Obj Obl | b. X CAUSES Y to MOVE Z |
| c. Subj V Obj X comp | c. X CAUSES Y to BECOME Z |
| d. Subj V Obl | d. X MOVES Y |
| e. Subj V Obl _u | e. X DIRECTS ACTION at Y |

しかし、Goldberg (1995) の一般化には次の問題点がある。それは (16') における各々の形式が (16'') の意味を獲得するまでのメカニズムが説明されていない。近年の認知言語学において盛んに議論されている、動機づけの問題に十分な説明が与えられていないのである (cf. Radden 2004)。実際、氏による他の論考においても、各々の構文の存在は「慣習化の結果であり、文法が元々内在的に持っているもの」という以上の一般化は見られない (cf. Goldberg 1998, 1999, 2002)。こうした分析的態度は結果論的なものであり、実質的には構文の動機づけをめぐる分析放棄に等しい。さらに、この一般化自体においても (説明理論として修正せねばならない) 2点の問題点がある。第一にそもそも慣習化というものが明らかにされていない状況において慣習化を説明項に用いたところで、それはブラックボックスに説明を還元している以上の意味を持たない。第二に慣習化の結果、文法に構文が存在するという一般化は、概念的循環論を引き起こしている。慣習化によって構文の存在を説明して、構文の存在によって慣習化を正当化する構造になっているからである。

以上の問題点に対して、本書のアプローチは一つの突破口を示唆しているように思われる。というのは、統語形式のまとまりが特定の意味を獲得するまでのメカニズムを明らかにするためには、やはり構成要素間の有機的関係をきちんと捉えておく必要があるが、この点をめぐる Goldberg (1995) の枠組みは不十分なものと言わざるを得ない。その証拠として (17)、(18) のような反例が報告されている (Verspoor 1997:144)。

- (17) a. The pebbles rolled smooth.
 b. John ran to exhaustion.

(18) *Mildred exercised into the room.

(17) が興味深いのは、様態移動動詞 (manner of motion verb) が結果句とともに生起している点である。そして、この文は自動移動構文 (cf. 16d) というより自動詞結果構文 (e.g. The river froze solid) として解釈される。しかし、問題は Goldberg (1995) の分析に従うならば、動詞 roll や run の参与者役割は主題 (theme) であることから、自動詞結果構文の patient 項とは融合できないことになる。すなわち、(17) は自動詞結果構文とは認定されなくなってしまふ。また、(18) は機能的にも構造的にも自動移動構文として何ら問題がないはずであるが、実際は容認されない。以上の事実は、現在までの Goldberg の枠組みでも説明できないものであり、ある種の限界を示唆している。

こうした経験的問題は構成要素間の問題を含め、動詞の意味と構文の意味の合致がどの程度のものなのか、そして、それを司るメカニズムは何かという問題を検討することから再考察すべきものである。念のため言うが、構成要素間の問題を捉えることは決して動詞意味論への逆戻りを意味するものでもなければ、動詞意味論と構文文法を都合よく混ぜ合わせた折衷案を意味するものでもないということに注意を喚起したい。また、構成要素間の関係を捉えることは、Fillmore (1988) や Kay (1997) といった古典的構文文法の枠組みから考えても理論的矛盾をきたすものではない (cf. 早瀬 2002)。

では、構成要素間の問題を記述するため、どのような道具立てないしは記述の見方に立つべきだろうか。そのヒントが本書に示されている。それは、2点ある。1点目に構成要素間の有機的關係に身体論的動機づけを与えることである (cf. 池上・Zlatev 2005)。2点目に構成要素間の双方向的制約から構文現象を捉えることである。中間構文の例で言えば、(8) のような一般化が一つの見本になるであろう。(8) の一般化は、構成要素の認知的特徴づけの要請を満たすと同時に、従来の動詞からの一方向的要請、すなわち動詞が項を要請するという考え方 (cf. Pinker 1989, Levin and Rappaport 1995, 影山 1996) とは異なっているように思われる。その理由は、主語名詞句が持つアフォーダンスから動詞句を位置づけているからである。そして、述語動詞が対象の探索活動を表す点に着目しながら、全体の意味として探索活動の結果、対象の見えの変化を表すと分析している点で、本書の分析は部分の特徴づけのみならず、部分と部分の關係性を捉えつつ、全体と部分の關係性を並列的に記述している。

最後に、上述の分析に対する反例を一つ指摘しておく。本書の5章では、上述したように、中間構文の述語動詞は探索活動を表すものと主張しており、反対に探索活動を表さない動詞、例えば、認知・受領に関わる動詞 (e.g. acquire, learn, recognize) や作成動詞 (build, draw, make) などは中間構文に用いられないと主張している。しかし、この一般化には (19) の反例が存在する。

- (19) a. That kind of story understands quite easily.
b. This sort of stories believe easily.

(19) は母語話者によって若干のゆれはあるものの、個人的に調べた結果、概ね容認される。これが事実であるならば、探索活動を表すかどうかという問題と中間構文の成立の問題は再考する必要があると言えよう。少なくとも探索活動を表す述語動詞というものが中間構文の成立における充分条件にならないことは確かと言える。なぜなら探索活動を表す動詞すべてが中間構文に成立することはないからである。また (19) の反例がある以上、探索活動が中間構文の成立における必要条件とも言えない。こうした混乱の元として本書では探索活動に関する(言語学的に認定しうる)定義が不在であるという問題が挙げられる。というのは、3章において展開される生態心理学的位置づけ、つまり「知覚者の能動的な活動」とされる探索活動の言語学的位置づけを明らかにする必要がある。「探索活動を表す」ということを証明しうる言語学的証拠を(現象の羅列や意味直感以外の方法で)明確に示し、探索活動を表す述語のクラスと表さない述語のクラスを中間構文とは独立に定義する必要があるように思う。

6. 課題

ここでは、本書の現象分析において欠如していると思われる視点を指摘すると同時に関連現象を紹介する。2点の問題提起と1点の関連現象を紹介する。1点目の問題提起は、構文ネットワークの観点から構文間の連続性をめぐる問題を考え、構文の特徴づけに関する問題点を指摘する。2点目の問題提起は、コーパス言語学の観点から仮説の検証をめぐる問題を考え、コーパスベースアプローチとの並行性について指摘する。最後に、本書の分析と関連性の高い日本語の構文現象として自他同形表現を紹介し、一般化可能性について検討してみたい。(著者の意図に反する部分があるかもしれないので) わら人形倒しになることを承知の上、3点を指摘しておきたい。

6. 1. 構文文法からの示唆

Goldberg (1995) は、その理論的・記述的是非において様々な評価がある。しかし、概ねの評価、特に認知言語学的視点から見た場合、継承関係や構文のネットワークという観点から文現象を捉えた点は、語彙主義に基づく従来の分析に対して一石を投じたものであり、大いに評価すべき視点である (cf. Langacker 2003, 2005, forthcoming)。この構文ネットワークの観点から、4章における構文の連続性の議論を捉えてみた場合、一つの問題点が浮き彫りになる。

まず、Goldberg の継承リンクモデルは、上位クラスから下位クラスへの継承の過程そのも

のではなく、構文間に見られる共通性を捉えるためのモデルであることを確認しておきたい。このことは、本書のモデリングとも概ね同じ方向性を持っていると言える。特に4章の議論に関連づけて考えてみた場合、(5)の中間構文と(6)の主体移動表現と(7)の知覚動詞構文の連続性が正しいならば、それは継承リンクモデルの観点からも再分析できるはずである。(5)から(7)を以下に再度示す。

- (5) Bureaucrats bribe easily.
- (6) This flower smells sweet.
- (7) This road goes from Modesta to Fresno.

まず、著者はこれら3つの構文の連続性を(8)の機能的側面に注目し、分析を行っている。一方、継承関係という観点から三者の連続性を検討してみた場合、第一にクリアせねばならない問題として形式的類似の問題がある。というのは、構文文法的アプローチでは意味が類似していても形式が類似していない場合、両者を(継承リンクなどで)直接結びつけることはしない。その理由は簡単なもので、形が似ているならば、それらに意味的共通性を探るなり、動機づけを与えていくことは可能であるが、その逆、すなわち一つの形式がある特定の意味をもっていたからといって、その形式の存在が類似の意味を持つ他の形式の存在を動機づけることはないと考えられるからである。

さて、本題に戻って形式間の類似という点から現象を捉えてみた場合、まずは(5)と(6)の近接性が確認できる。本書によれば、その証拠は2点ある。1点目に表面的には(5)は副詞句(easily)で、(6)は形容詞句(soft)で表現されているが、Taniguchi(1994: 281-289)によれば、(6)の構文も歴史的には、(5)の構文同様に副詞句と共に共起していたことが指摘されている。2点目に(5)の中間構文においても、(20)のように形容詞句が表れることがある(Horton 1996:329)。

- (20) a. The meat cuts *tough*. (=This meat is tough when someone cuts it.)
- b. The cake eats *short and crisp*. (=The cake is short and crisp when someone eats it.)

以上の事実関係から、(5)と(6)は継承関係に基づく一般化の第1問題がクリアされた。一方、(7)においても(5)との形式的類似が確認される。本書によれば、その証拠は2点ある。1点目に(5)と同じように主体移動表現においても(21)のように副詞句での使用例があること、2点目に(22)が示すように副詞句が義務的であることが挙げられる(Matsumoto 1996)。

(21) The road runs *straight*.

(22) *The road runs.

これらの事実関係を総合して考えてみた場合、(5) から (7) へ何らかの継承関係に基づく一般化の可能性が示唆される。さて、この第1問題がクリアされるならば、次に考えるべき第2問題として、構文の差異に関する問題を明らかにしなければならない。すなわち、(5)、(6)、(7)の継承関係は「どれだけのものがどこにどうやって」継承されているのかを考えるべきである。

しかし、第2問題はすぐには議論できない。というのも、どれだけのものがどこにどうやって継承されているのかは、構文間の類似性のみならず、構文間の差異をも同時に踏まえて考えなければならないからである。まず、明らかにしておくべきは、(5) から (7) の構文としての独立性を保証するものが何であるかを突き止める必要がある。ある文タイプが構文として位置づけられるのであれば、その前提条件としてその構文にしか存在しない特徴がなければならない。本書は(8)の意味的共通性のみで議論が集中しており、構文間の差異の問題を含め、構文としての証拠づけの点でやや物足りない感がある。連続性を記述することは、単なる同一性の記述とは違う。したがって、類似性のみならず、非類似性をも明確に記述するものなければならない。いずれにしろ、この問題はすぐに結論が出せる問題ではないが、本書のモデルの妥当性を示すためにも絶対に必要な作業と言えよう。また、このことを明らかにすることは理論的にも大きな価値がある。というのは、今のところ本書が提示する枠組みはかなり独自性が強く、構文文法および認知文法といったオーソドックスな構文アプローチとの接点はあまり見えてこない。したがって、本書が上記において指摘した問題に何らかの答えを出すのは、他の構文アプローチと接点を持ちうる点においても重要と言える。

6. 2. コーパスベースの検証

本書はギブソンに代表される直接知覚論の観点から言語現象を鋭く分析し、言語の認知科学的基礎づけを行っている。しかし、その割に多くの事例が作例を中心とする従来の内省型分析の域を脱していない点はやや残念である。というのは、本書において提案されている様々な(言語事実の質的観察に基づく)仮説を実験科学の手法を用いて検証する必要があるように思われる。誤解のないように言うが、ここで言う実験科学からの検証というのは、決して心理実験のような行動データからのサポートのみを意味するものではない。これには、様々な手法が考えられるが、もっとも現実的な手法として電子化コーパスを用いた検証が有効ではないかと思われる。

構文の問題を含む、認知言語学の多くの関心事はコーパス言語学と親和性が高い。それを象徴するものとして、近年、認知言語学の理論的基盤を示すものとして注目されている用法

基盤モデル (usage-based model) (Langacker 1999) はコーパス利用によって真の内実を得ると考えられている (cf. 早瀬・堀田 2005, 李 2004, Bybee 2005)。事実として Bybee (1985) のように、かなり早い段階からこうした認識を示す研究があり、このことから考えると、認知言語学とコーパスの接点は決して偶然ではない。また、構文文法とコーパスの親和性に関しても都築 (2004) は次の3点を指摘する。1点目に構文文法では語と構文は両者とも意味と形式のペアとして厳密に区分されない。したがって語と同じように構文にも固有の特性があると考えており、こうした事実を調べる上で、文脈をともなったコーパスデータは好都合と言える。2点目に構文文法では言語能力と言語運用の厳密な区別を設けない。用法の集積であるコーパスは言語知識に関する直接的な証拠を提示する。3点目に構文文法はコアのみならず周辺現象までも含むすべての言語現象を特徴づける理論を目指す。コアな現象に対する量的分析はもちろんのこと、周辺現象に関する質的観察においてもコーパスはその威力を発揮する。

こうした両者の親和性に着目した実際の研究として Rudanko (2002) や Boas (2003) による結果構文の分析が挙げられる。両者はともに動詞と選択関係にある要素との共起関係に基づく研究であり、理論面・実証面いずれにおいても説得力ある分析を展開している。なお、Rudanko (2002) は動詞と前置詞句補部の共起関係を分析することで、意味的・統語的分布を明らかにした上でそれらが使役移動構文の一種であると論じている。Boas (2003) は量的分析を基本にしながらも、使用基盤主義の考え方や構文文法との関係、さらにはフレーム意味論との関係なども言及しており、理論的整備も試みられている。次に Stefanowitsch and Gries (2003), Gries and Stefanowitsch (2004) ではさらに一歩進んで、統計的スコア法を用いて構文と語彙の結びつきを定量的に分析しており、構文のプロトタイプを計量的に推定するといった実証的考察も行われている。こうした流れは、その歴史こそ浅いが、認知言語学の新たな方向性を示唆するものとして、確実に注目されつつある。

以上で示したコーパス基盤の分析手法は本書のアプローチに対してもいくつかの課題を与えてくれる。それは、本書で主張されているアフォーダンスやエコロジカル・セルフの一般性や汎用性に関する問題、すなわち偶々一部の事実に関してうまく説明できたのではない、ということはどこにも示されていない。本書の分析的視点が、単なる「言語現象を見る面白い視点」で終わるのではなく、言語現象に対する必要不可欠な視点であり、言語使用においても実在する「有効なモデル」であることを示す必要があるように思われる。少なくとも後者の問題を考える上で、コーパスベースアプローチは非常に有効かつ現実的と言えよう。そして、この種の検証は捉え方の意味論を実証するという意味においても理論的・記述的価値の高い仕事になるはずである。

6. 3. 日本語の記述的視点からの支持

ここでは、本書の4章から8章の考察およびその主張を支持すると思われる日本語の構文現象を現象レベルで紹介する。(23)はコーパスから収集した事例である。

- (23) a. 相手の男性がそんなあなたを受け止めてくれる広い心の持ち主なら、恋愛から幸福な結婚へとシトシト拍子に話が運ぶことは間違いありません。(ブレンダン・フレイザー『青春の輝き』)
- b. どんどん潮が引いていき、砂地が黒々と出てくる。(Web 検索「新潟地震の証言と教訓」)
- c. 桃の果汁のような陽の光が、松山の雪にいっぱい注ぎ、それからだんだん下に流れて、そこらいちめん、雪のなかに白百合の花を咲かせました。(幸田露伴『旅行の今昔』)
- d. 黒田邸に軍兵がよせるという知らせがあった。(川又千秋『時間帝国』)

(23)の現象は、従来の研究では、自他同形表現の問題として議論された現象である (cf. 水谷 1965, 須賀 1980, 櫻井 1977, 国広 1997, 李 2001)。この構文において興味深いのは、傍点部の本動詞はそのいずれも語彙的カテゴリーにおいては、(一部の異論があるものの)他動詞として定義づけられる。しかし、問題は、文全体の意味的振舞いということにおいては明らかに自動(詞)的振舞いを見せる。したがって、動詞の語彙的意味と文全体の意味的振舞いに不一致が生じていることになる。

さてこの問題をめぐって従来分析の多くは自動詞か、他動詞かという問題に終始しており、文全体の振舞いに対する本質的問題については考察が及んでいない。その結果、不当な還元主義による反証不可能な分析が続き、(23)は単なる周辺例として片付けられたのが現状といえよう。しかし、本書のアプローチは、(23)が持った言語現象としての本当の面白さを教えてくれる。というのは、(8)で示した一般化が(23)に関してもほとんど問題なく言える。本書の分析はこの現象に新たな位置づけを与えている。すなわち、(23)の動詞句は主語名詞句のアフォーダンスを表す点、行為者が明示されておらず、エコロジカルセルフのレベルで捉えられる点、見えの変化を表している点に注目してほしい。これらの一致が偶然でない限り、(23)の現象は中間構文との連続性という視点から捉えられる可能性が出てくる。

7. 最後に

本書は、その第一印象において著者の視点の広さと言語事実の豊富さに圧倒されてしまう。特に理論言語学系の研究者が等閑視することの多い国語学や日本語学の先行研究に対しても綿密に検討しており、著者の研究に対する姿勢や身体性が伺える。一見したところ無関係に見える現象間・概念間を見事に繋ぎ合わせ、日常言語表現に新たな位置づけを与えており、発見の喜びに満ち溢れている。先行研究の検討の仕方や問題提起の鋭さなどこれから研究を

始めるものにとっては学ぶべきところが多い一冊と言える。

最後に、アフォーダンス的解釈を語用論との緊張関係で考察したパイオニア的研究として仲本(2000, 2005)があるのでぜひ参考にしてほしい。また、著者も認めているように、本書は生態心理学に対して独自の解釈を行っている。本書をきっかけに生態心理学をさらに勉強してみたいという読者は、Reed (1996) および佐々木 (1994) のようなすぐれた入門書があるので、合わせて参考にしてほしい。

<参考文献>

- Barsalou, L. W., K. Simmons, A.K. Barbey and C.D. Wilson. 2003. "Grounding Conceptual Knowledge in Modality-Specific Systems." *Trends in Cognitive Science* 7, 84-91.
- Boas, H. C. 2003. *A Constuctional Approach to Resultatives*. Stanford: CSLI Publications.
- Bybee, J. 1985. *Morphology. A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, J. 2001. *Phonology and Language Use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, C. J. 1988. "The Mechanisms of 'Construction Grammar.'" *BLS* 14: 35-55.
- Gibson, J. J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*, Boston, MA.: Houghton Mifflin. (『生態学的知覚論：ヒトの知覚世界を探る』古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳, サイエンス社, 1985.)
- Givón, T. 1979. *On Understanding Grammar*. New York: Academic Press.
- Goldberg, A, E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press. (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子 訳. 『構文文法論』東京: 研究社, 2001.)
- Goldberg, A. E. 1998. "Patterns of Experience in Patterns of Language." In M. Tomasello(ed.) *The New Psychology of Language*. 203-220. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Goldberg, A. E. 1999. "The Emergence of the Semantics of Argument Structure Constructions." In B. MacWhinney ed. *The Emergence of Language*. 197-212. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Goldberg, A. E. 2002. "Surface Generalizations: An Alternative to Alternations." *Cognitive Linguistics* 13-4, 327-356.
- Gries, S. Th. and A.Stefanowitsch. 2004. 'Extending Collostructional Analysis: A Corpus-based Perspective on 'Alternations'.' *International Journal of Corpus Linguistics* 9-1, 97-129.
- 早瀬尚子. 2001. 『英語構文のカテゴリー形成』東京：勁草書房.
- 早瀬尚子・堀田優子. 2005. 『認知文法の新展開：英語学モノグラフシリーズ 19.』東京：研究社.
- 廣瀬幸生. 1997. 『人を表すことばと照応』廣瀬幸生・加賀信広『指示と照応と否定』1-89. 東京：研究社.
- Horton, B. 1996. "What Are Copula Verbs?" In E. H. Casad ed. *Cognitive Linguistics in the Redwood*. 319-346. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』東京：大修館書店.
- 池上高志・J. Zlatev. 2005. "From Pre-Representational Cognition to Language." *JCLA 2005 Conference Handbook* 86-90.

- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』 東京：くろしお出版.
- Kay, P. 1997. *Words and the Grammar of Context*. Stanford, California: CSLI Publications.
- 国広哲弥. 1974. 「日英語表現体系の比較」『言語生活』 270, 46-52.
- 国広哲弥. 1997. 『理想の国語辞典』 東京：大修館書店.
- Langacker, R. W. 1990. "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1-1, 5-38.
- Langacker, R. W. 1999. "A Dynamic Usage Based Model". In M. Barlow, and S. Kemmer eds. *Usage Based Model of Language*. 1-64. Stanford, California: CSLI Publications.
- Langacker, R. W. 2003. "Constructions in Cognitive Grammar." *English Linguistics* 20, 41-83.
- Langacker, R. W. 2005. forthcoming. "Integration, Grammaticization, and Constructional Meaning."
- Neisser, U. 1988. "Five Kinds of Self Knowledge." *Philosophical Psychology* 1-1, 35-59.
- 李在鎬. 2001. 「他動詞文のゆらぎ現象に関する構文的アプローチ」, 『言語科学論集』 7, 1-21. 京都大学
- 李在鎬. 2003. 「認知事象の複合的制約に基づく結果構文再考—構文現象の体系的記述を目指して—」『認知言語学論考』 3, 183-262. 東京：ひつじ書房.
- 李在鎬. 2004. 「助詞『に』の定量的分析への試み: 語法研究の新たな手法を求めて」『日本認知言語学会論文集』 4, 55-65.
- Levin, B, and M. Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Matusmoto, Y. 1996. "Subjective Motion and English and Japanese Verbs." *Cognitive Linguistics* 7-2, 138-226.
- 水谷静夫. 1964. 「『話を終わる』と『話を終える』」『口語文法講座 3 ゆれている文法』 45-60. 東京：明治書院.
- Murphy, G. L. 2002. *The Big Book of Concept*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 仲本康一郎. 2000. 「アフォーダンスに基づく発話解釈—行為の難易度を表す形容詞文」『語用論研究』 2, 50-64.
- 仲本康一郎. 2005. 『認知意味論に基づく属性表現の意味解釈のメカニズム: エージェント指向の意味論の構築へ向けて』 京都大学人間環境学研究所博士論文.
- Pinker, S. 1989. *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Radden, G. (ed.) 2004. *Studies in Linguistic Motivation*. Berlin: Mouton De Gruyter.
- Reed, E. S. 1996. *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford: Oxford University Press. (細田直哉 訳. 『アフォーダンスの心理学—生態心理学への道』, 新曜社, 2000.)
- Rudanko, J. 2002. *Complements and Constructions: Corpus-Based Studies on Sentential Complements in English in Recent Centuries*. Lanham: University Press of America.
- 櫻井光昭. 1977. 「古代語の再帰的他動詞」『学術研究 国語国文学編』 26, 50-72. 早稲田大学教育学部.
- 佐々木正人. 1994. 『アフォーダンス—新しい認知の理論』 東京：岩波書店.
- 佐々木正人・三嶋博之. 2005. 『生態心理学の構想—アフォーダンスのルーツと先端』 東京：東京大学出版会.
- Stefanowitsch, A. and S.Th. Gries. 2003. "Collostructions: Investigating the Interaction of Words and Constructions." *International Journal of Corpus Linguistics* 8-2, 209-243.
- 須賀一好. 1980. 「併存する自動詞と他動詞の意味」『国語学』 120, 112-141.
- Talmy, L. 2000. *Toward a cognitive semantics Vol.II, Language, Speech, and Communication*.

Cambridge, Mass.: MIT Press.

Taniguchi, K. 1994. "A Cognitive Approach to the English Middle Construction." *English Linguistics* 11, 173-196.

Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

都築雅子. 2004. 「コーパスと理論研究における仮説の提案と検証：結果構文の分析を通して」『英語コーパス研究』11, 169-183.

宇野良子・池上高志. 2003. 「ジョイントアテンション／予測と言語志向性を描えるメカニズム」山梨正明編. 『認知言語学論考』3, 231-274. 東京：ひつじ書房.

時枝誠記. 1941. 『國語學原論』東京：岩波書店.

Verspoor, C. M. 1997. *Contextually-Dependent Lexical Semantics*. Ph.D. dissertation, University of Edinburgh.

山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版.